CORE Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk

大分県立芸術文化短期大学研究紀要　第41巻（2003年）

〔論　　文〕

共感特性と他者の心理状態把握との関連：短期大学生を対象として

The Relationship between Empathy and Understanding psychological characteristics of a junior high school student seen by junior college students

柴　田　雄　企
Yuki Shibata

ABSTRACT

The purpose of this study was to investigate the relationship between empathy and understanding psychological characteristics of a junior high school student as seen by junior college students. For this purpose, subjects (94 junior college students, mean age=18.7) were asked to read a case report of a 12 years old boy and to assess his mental state by two psychological inventories (Children's Depression Inventory and Harter's Self-Perception Profile) putting themselves in his place. And the multidimensional scale of empathy was administered to the subjects. The multidimensional scale of empathy consists of four subscales, i.e. perspective-taking, fantasy, empathic concern, and personal distress. Results showed that there was positive correlation between perspective-taking and athletic competence (one of the subscales of the HSPP) but other relations between the multidimensional scale of empathy and CDI, HSPP were negative correlation. Results indicated that personal distress is different from other subscales of the multidimensional scale of empathy. It was discussed mainly from the validity of multidimensional scale of empathy.

Key words: empathy, multidimensional scale of empathy, junior college students

問題と目的

他者が感情を体験しているのを見た時、それを見た側に、それと一致した、あるいはそれに対応した感情的反応が起こることを共感という。柴田ら（1998）は、この相手の感情を感じ取るという共感において、教師と心理臨床家との間で差異がみられるのではないかと考え、両者を比較した。対象者に、ある中学1年生の少年の立場になって、抑うつ尺度であるChildren's Depression Inventory（CDI）と自己評価尺度であるHarterの自己認識プロフィールを評定させた。その結果、教師と心理臨床家において、CDI得点と自己認識プロフィールの自己価値、学業、スポーツ、行動基準において有意差が見られ、職種の違いが中学生の心理状態の把握に影響することが示唆された。

共感の測定法を大別すると、①共感が生じるような状況や場面を呈示し、実際に共感反応が生じるかどうかを見ようとする、状態としての共感測定法と、②個人の性格特性としての共感を測定しようとする、特性としての共感の測定法とがある（澤田、1992）。

柴田ら（1998）では、ある事例の手記的レポートを読みとって、その心理状態を把握し、抑うつ尺度と自己評価尺度を評定してもらうという、投影法的手法を用いたのであるが、これは状態

としての共感を、質問紙によって測定したものといえる。この状態としての共感へは、もともと個人が持っている、特性としての共感も影響していると考えられる。

そこで、本研究では、Davis（1983）の多次元共感測定尺度を用い、柴田ら（1998）で用いた投影法的手法と、個人の性格特性としての共感性の一般的傾向としての共感、すなわち、特性としての共感との関連について検討する。

方 法

1．対象者

短期大学生94名（女性）。平均年齢18.68歳（SD=0.69）。

2．評定尺度

(1)Davis（1983）の多次元共感測定尺度を桜井（1988）が翻訳したもの

これは、共感の認知的側面を測定する4つの下位尺度、視点取得（perspective-taking）尺度と、共感の情動的側面を測定する共感的配慮（empathic concern）尺度、空想（fantasy）尺度、個人的苦悩（personal distress）尺度で構成されている。各尺度は7項目から成る。視点取得尺度は他者の立場に立って、物事が考えられる程度を示しており、例えば、「友達をよく理解するために、彼らの立場になって考えようとする」という項目が含まれる。共感的配慮尺度は他者に対して、同情や配慮をする程度を測定しており、例えば、「周りの人たちが不幸でも、自分は平気でいられる（逆転項目）」という項目が含まれている。空想尺度は小説、映画、演劇などの架空世界の人と同一視する程度を測定しており、例えば、「劇や映画をみると、自分が登場人物の一人になったように感じる」という項目がこれに含まれている。個人的苦悩尺度は援助が必要な場面で動揺する程度を測定しており、例えば、「緊急事態で、ひどく援助を必要とする人を見ると、とりみだしてしまう方である」という項目が含まれている。各項目は4段階評定（1～4点）で、高得点ほど共感が高いと解釈される。

(2) 小児うつ病調査票（Children's Depression Inventory）

CDIは1983年に、Kovacsによって開発された。うつ状態の子どもたちの自己評価尺度であり、国際的にも最も用いられているものである。27の質問項目があり、それぞれに3つの回答（2点、1点、0点）のどれかにチェックされるように作られている。フルスコアは54点である。この日本語版は村田ら（1992）が作成し、信頼性・妥当性も確かめられ、現在は日本でも学校精神保健におけるスクリーニング・テストとして広く使用されるようになっている。日本の中学生の平均得点は14～15点で、カットオフ・スコアは22点である。得点が高いほど、強い抑うつ状態とみなされる。

(3) 児童用自己認識プロフィール(Self-Perception Profile for Children)

自己認識プロフィールは、子どもの自己価値（Self-worth）がどのような状態であるか（かなり高まっているか、自信を失ってかなり低下しているかなど）、また、それがどのような側面（学業成績、友人関係、運動能力、容姿・スタイル、行動基準の5つ）と関連しているのかを見極めようとして、Harter（1985）によって開発されたものである。村田ら（1992）が日本語版を作成し、信頼性・妥当性を検討してきたものである。自己価値を含めて6つの下位尺度から成り、それぞ

れ6つの質問項目（計36項目）を持つ。4段階評定で最高値を4，最低値を1として得点化している。得点が低いほど、自信をなくしているとみなされる。

CDIと児童用自己認識プロフィールの2つの質問紙は、子どもが今どのように悲しみを背負い、苦しんでいるか、また、それはどのようなことに起因しているのか理解する手がかりを得る上で、臨床的にも有用だとみなされている。

３．手続き

Davis（1983）の多次元共感測定尺度を評定してもらい、その後、ある事例の経過を手記風に約1600字に記述したものを読んでもらい、その事例の立場になって2つの質問票（CDIと児童用自己認識プロフィール）に記入してもらった。その際、次のような説明を行った。「ここに書いてある事例は12歳の中学1年生の少年についてのものです。匿名性を守るために若干の修正は行っています。今から私が読みますので、一緒に目で追って下さい。その後もう一度よく読み直して下さい。それから、現時点でのこの少年の身になって、次にお渡しする2つの質問票に記入して下さい。各人によって、少年の立場になっての受け取り方に違いがあるのか、あるいは、ほとんどの方が共通した捉え方をするのかを検討したいので、ご協力していただければ幸いです。また抵抗をお感じになる方は、提出して頂かなくても構いません。また、整理用紙に名前を記入して下さる必要はありません。性別・年齢は記入して下さいますようお願いします」。

ここで使用した事例の経過を記したものは以下の通りである。

僕は12歳、中学1年生の男子です。学校に行けなくなって、まもなく1ヶ月になります。気分がすぐれなくなったのは夏休みに入った頃です。疲れやすく、頭痛や身体のあちこちの痛みが続いています。楽しいという気持ちになれず、以前は好きだったJリーグのTV放送を見てもおもしろくありません。新学期が始まって、友達はいろいろ夏休みのことを愉快に話し合っているけど、僕はそれに入っていけません。授業中の先生の説明を注意深く、聞くことが出来なくなってきました。授業の内容もよくわかりません。それでも、9月は頑張って登校しました。10月になると、夜、眠れず、朝、起きるのがとてもつらくなりました。起きようとしても、とても身体が重く、何かがのしかかっているようです。母さんに強くうながされて、どうにか起き上がり、登校の用意をします。しかし、朝食をとろうとすると、むかついてきます。無理して口に入れると、吐き気が起こります。朝食を取らず、学校に出かけました。教室でも友人とあまり話もしません。先生は「どうした。元気を出せ」と励ましてくれました。しかし、授業を聞いても、何も頭に残りません。机に坐っているのがやっとです。どうして僕はこうなったのかと思うと、ますます気持ちがふさぎます。自分に自信が持てません。どうやったら、みんなと同じように出来るのか。もう僕は元のようになれないのではという不安が襲ってきます。すると教室にいるのがもう恐くてたまりません。

1ヶ月前頃から、朝、どう頑張ろうとしても起き上がれません。体も心も凍りついたようになってしまって、自分ではどうにもなりません。もう限界だと思いました。学校もずっと休んでいます。もうどうなってもよいと思います。母さんは僕が怠けてさぼろうとしているとは思ってないようです。どこか身体の具合が悪いのだろうと思っているようですが、僕がこんなに苦しく追い詰められてしまった気持ちだとは考えていません。

僕の家族は、父45歳、会社員、母42歳、専業主婦、僕、妹9歳、小学4年生の4人です。父は今、沖縄支店に単身赴任中です。父はまじめで、責任感の強い人です。頑張り屋です。僕が相談する

と、まじめに考えてくれると思います。人に迷惑をかけてはいけないとよく話していました。母は、優しい人ですが、心配性です。僕の成績のこと、高校進学のことをとても気にしています。妹は僕と違って天真爛漫な性格で、いつもはしゃいでいます。

僕がこうなったのはいじめにあったとか、成績が1学期よくなかったためというのではありません。今、思うと、僕の性格が小学校5年生頃から少しずつ内向的で、神経質になって、のびのび出来なくなっていたことも関係していると思います。特に、クラスの友達と比べて、僕はこんな所がつまらないとか、あんなこともできないとか自分の悪い面だけを考えるようになっていました。あの時、あんな発言をしたので、みんなの気分を害さなかっただろうかとか、みんなの常識から外れているのではないかなど気にするようになってきました。実際はみんなと協力して何でもやってきたし、浮き上がった行動はしていないのですが。僕は特に頭がよいというのではありませんが、努力したら、成績はまあまあのところにいると思います。運動神経はよい方だと思います。スポーツは何でもこなしました。友達も多い方ではありませんが、人に嫌われる方ではないと思います。スタイルはまあまあです。僕がかっこいいと言った女の子がいると冷やかされました。そのようなことも今はもうどうでもいいのです。僕はもう何事にも自信がありません。人生って何か、人生は生きる価値のあるものかとさえ考えるのです。カウンセラーの先生は、そうあせるな、君はまだ12歳ではないか、ゆっくり話し合おうと言ってくれるのですが…。

結 果

1．多次元共感測定尺度の平均値と標準偏差

本研究および桜井（1988）における、多次元共感測定尺度の平均値と標準偏差を表1に示した。大学生87名を対象とした、桜井（1988）の結果と比較すると、視点取得、共感的配慮、空想の平均値が低かった。個人的苦悩は同程度であった。また、多次元共感測定尺度の下位尺度間の相関について検討したところ、視点取得と空想（r=.189）、視点取得と共感的配慮（r=.374）、空想と共感的配慮（r=.226）の間にそれぞれ有意な正の相関がみられた。

表1　多次元共感測定尺度の平均値と標準偏差

	視点取得	共感的配慮	空想	個人的苦悩
本研究	15.90（3.89）	16.80（3.06）	17.02（4.59）	15.80（4.56）
桜井（1988）	19.91（3.76）	22.06（2.96）	22.17（3.53）	17.53（4.10）

（　）内は標準偏差

2．CDIと自己認識プロフィールの平均と標準偏差

本研究と柴田ら（1998）におけるCDIおよび自己認識プロフィールの平均値と標準偏差を表2に示した。また、本研究におけるCDIと自己認識プロフィールの下位尺度との相関を検討したところ、「自己価値」（r=-.259）、「学業成績」（r=-.217）、「友人関係」（r=-.340）、「行動基準」（r=-.183）との間に負の有意な相関関係があった（表2）。

表2　本研究と柴田ら（1998）におけるCDIと自己認識プロフィールの平均値と標準偏差

	本研究	柴田ら（1998）	
		教師群	心理臨床家群
CDI	34.17 (8.01)	32.59 (8.36)	36.79 (6.25)
自己価値	1.89 (0.66) **	1.54 (0.49)	1.26 (0.31)
学業成績	2.06 (0.54) *	1.98 (0.49)	1.57 (0.47)
友人関係	2.26 (0.45) **	2.03 (0.44)	1.93 (0.45)
運動能力	2.64 (0.63)	2.77 (0.48)	2.57 (0.55)
容姿・スタイル	2.34 (0.71)	2.69 (0.47)	2.61 (0.51)
行動基準	2.31 (0.46) *	2.13 (0.40)	1.88 (0.50)

**=p<.01　* =p<.05　　（ ）内は標準偏差

(1)CDIについて

CDIの平均得点の平均値は34.17点であった。これは、柴田ら（1998）での教師群の32.59点と心理臨床家群の36.79点の間に位置する点数であった。

(2)自己認識プロフィールについて

表2に示した通り、本研究の被験者が評定した各下位尺度の平均値は自己価値が1.89、学業成績が2.06、友人関係が2.26、運動能力が2.64、容姿・スタイルが2.34、行動基準が2.31であった。

３．多次元共感尺度とCDIおよび自己認識プロフィールとの関連

多次元共感尺度とCDI、および多次元共感尺度と自己認識プロフィールの相関について検討した。多次元共感尺度とCDIの間では、ピアソンの相関係数を求めたところ、「個人的苦悩」においてのみ、CDIと負の相関（r=-.176, p<.05）が見られた。

多次元共感尺度と自己認識プロフィールの間では、ピアソンの相関係数を求めたところ、多次元共感尺度の「視点取得」と自己認識プロフィールの「運動能力」において正の相関が見られた（r=.201, p<.05）。また、多次元共感尺度の「個人的苦悩」と「学業成績」（r=-.184, p<.05）、「友人関係」（r=-.199, p<.05）、「行動基準」（r=-.171, p<.05）との間に負の相関が見られた。

考察

１．多次元共感測定尺度およびCDIと自己認識プロフィールの結果について

桜井（1988）の結果と比較して、本研究の対象者の平均値は全体的に低かった。桜井（1988）における対象者は大学生であり、本研究の対象者と単純に比較することはできない。しかし、桜井（1988）での対象者87名中69名が女子で、大部分が一回生であり、本研究の対象者と年齢については大きな違いはないことから、本研究の結果は、青年期の共感性が低下してきたということを示唆しているのかもしれない。

CDIの平均値は柴田ら（1998）の結果と同程度であり、教師と心理臨床家との間に位置する点数であった。一方で、自己認識プロフィールの自己価値は柴田ら（1998）の結果と比較すると、高くなっていた。

Harter（1989）のうつ病モデルに従うと、抑うつ得点が高いほど、自己価値は低くなる。よっ

てCDI得点が柴田ら（1998）での教師群と心理臨床家群の間にあったことから、自己価値も、柴田ら（1998）での教師群と心理臨床家群の間にあると思われたが、本研究の被験者は1.89であった。柴田ら（1998）での心理臨床家群は1.26で、教師群は1.54であった。このことから本研究の被験者は、事例の少年の抱く自己価値の低下をあまり重要視しなかったとみなすことができる。

２．多次元共感尺度とCDIおよび自己認識プロフィールとの関連

多次元共感尺度とCDIとの関連を見ると、CDIと相関関係が見られた多次元共感尺度の下位尺度は個人的苦悩のみであった。負の相関関係であったことから、これは援助が必要な場面で動揺する程度が高いほど、CDI得点が低くなっていたことを意味している。

次に、多次元共感尺度と自己認識プロフィールとの関連を見ると、個人的苦悩と自己認識プロフィールの下位尺度の学業成績、友人関係、行動基準との間に負の相関がみられた。これは、少年の事例を読んで動揺してしまった者には、それを否認しようという心の働きが起こったからかもしれない。個人的苦悩については、得点が高ければ高いほど共感能力が高いとは単純には言えないのかもしれない。また、多次元共感尺度の下位尺度間の相関関係を見ても、個人的苦悩のみが他の下位尺度と相関関係が見られず、他の下位尺度との異質性がうかがわれた。

本研究では、ある事例の手記的レポートを読みとって、その心理状態を把握し、抑うつ尺度や自己評価尺度を評定してもらうという、投影法的課題には、特性としての共感が影響しているのではないかと考え、このことを検討したのであるが、多次元共感測定尺度と正の相関が見られたのは、自己認識プロフィールの運動能力だけであった。このことは柴田ら（1998）で用いた他者の心理状態を把握する課題には、特性としての共感はほとんど影響していないということを示唆していると思われる。本研究で、多次元共感測定尺度で捉えた共感と中学生の心理状態把握との間に正の相関がほとんど見られなかった理由としては、中学生の心理状態把握は共感のみでは予測しえない可能性があるということが考えられる。柴田ら（1998）では中学生の心理状態把握において、教師群と心理臨床家群との間で差異がみられ、個人の職種が影響していることが示唆された。さらに、桜井（1988）も指摘しているが、多次元共感測定尺度の構造や妥当性、信頼性については検討が十分なされているとはいえない。また、本研究の対象者は女子学生のみであった。共感性における性差を考慮すると、男子学生も対象として比較する必要があるだろう。今後はこれらの点を改善して研究を進めていくことが望まれる。

引用文献

Davis, M. H. 1983 Measuring individual differences in empathy : Evidence for a multidimensional approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44, 113-126.

Harter, S. 1985 *Manual for the Self-Perception Profile for Children*. Unpublished manuscript, University of Denver.

Harter, S. & Marold, D. 1989 A model of the determinants and mediational role of self-worth : Implications for adolescent depression and suicidal ideation. A. Goethals and J. Strauss (Eds.) *Stanley Hall Symposium on the self*. Williams College.

Kovacs, M. 1983 *Children's Depression Inventory*. Unpublished manuscript, University of Pittsburgh.

村田豊久，堤龍喜，皿田洋子，中庭洋一 1992 日本版CDIの妥当性と信頼性について，九州神経精神医学，38，42-47.

村田豊久，堤龍喜，皿田洋子，中庭洋一，井上登生，吉永一彦　1992　児童思春期における自己認識の発達と抑うつ傾向との関連について　厚生省「精神・神経疾患研究委託費」2指－15　児童・思春期における行動・情緒障害の成因と病態に関する研究　平成3年度研究報告書，7-14.

桜井茂男　1988　大学生における共感と援助行動の関係―多次元共感測定尺度を用いて―，奈良教育大学紀要，37（1），149-154.

澤田瑞也　1992　共感の心理学　そのメカニズムと発達，世界思想社.

柴田雄企・村田豊久　1998　生徒の心理状態把握における教師と心理臨床家との差異について，九州大学教育学部紀要（教育心理学部門），43（2），237-243.